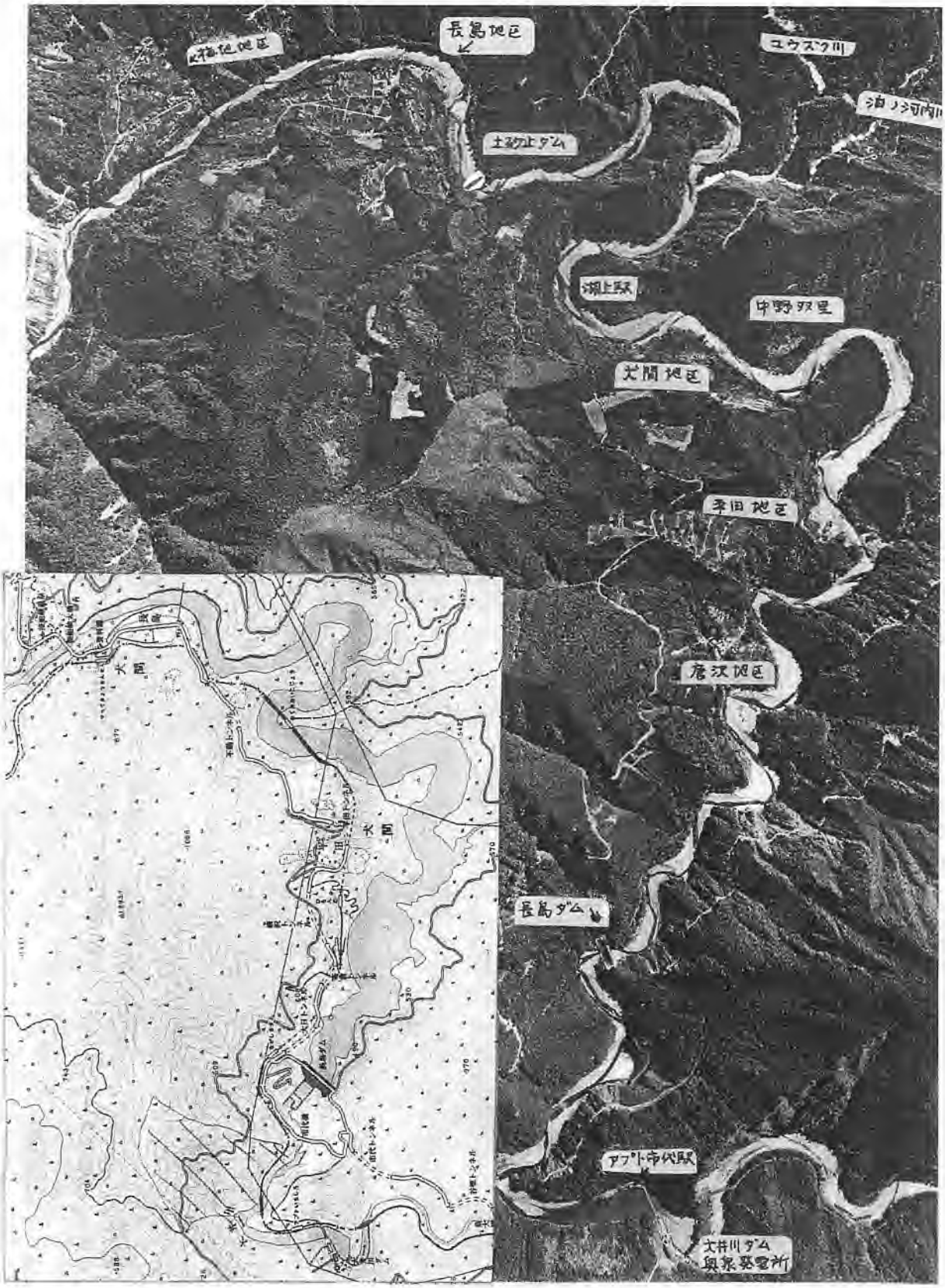
# 中川根ふる里通信

## ＝ 第82号 ＝

中川根ふる里通信
昭和61年4月20日創刊
編集・発行・連絡先
〒428-0313
静岡県榛原郡川根本町
上長尾849-6
TEL 0547 (56)-0015 FAX (56)-0020

# 長島ダムによって変化していった村々と大井川



# 長島ダム"接岨(せっそ)湖"特集

## おめでとう！4連続優勝
## 川根高校 川根本町田代
## 大村朱澄さん

兵庫国体 カヌー、少年女子「カヤック・シングル」
500m・200m、優勝!!

接岨湖にはカヌーの競技場があります。平成十五年秋のわかふじ国体カヌー会場となり、全国レベルの大会も開催される、好条件のカヌー場です。

そこで練習を重ねた川根高校カヌー部の大村朱澄さんが、全国の頂点に立ちました。おめでとうございます。大村さんは、前評判も高く、国体県選手団七三五人を代表して、決意表明もこなした実力派。勝って当然の重圧を克服して、見事優勝されました。川根高校としても、全国に、その校名を知らしめたし、接岨湖が生んだ、川根本町の宝物です。又、お父さんがコーチをし、お兄さんもカヌー選手のカヌー家族です。

☆十月十日静岡新聞より

＊カヌー・レーシング少年女子カヤックシングルの部

500mに続き200mも制し、2冠を達成した大村朱澄さん（川根高）は、レース後、ホッとしたような表情を浮かべた。「カヌー人生のベストではないけど、気持ち良くこげました」。重圧から解放された高校2年生の笑顔だった。

全国総体・文部科学大臣杯・日本選手権と今年に入って、高校生相手には負けなし。「勝って当然」と言われて仕方ない状況が大きな重圧になっていた。2日前の500mは優勝したものの、自分の納得するこぎはできなかった。大村さんのいう"苦手"という短距離のレースを前に緊張はピークに達していた。

しかし、レースになるとやはり強かった。重圧を振り切るように高回転のパドリングを見せると、一気に前に出た。「勝つことを意識してピッチを上げた」。そのまま加速を続け、2位に1.5秒差をつけてゴールした。

2年生にして全国大会を総なめにした大村さんの次の目標は、来夏の世界ジュニア選手権（チェコ）。中学3年の時に出場したが、今回はジュニアトップとして日本を引っ張る立場となる。「まだ女子では成し遂げられていないA決勝進出を果たし、世界につなげたい」。最終目標のオリンピックに向け、階段を登り始めている。――とてもうれしいニュースでした。頑張って下さい。―

☆平成十八年度、全国高等学校総合体育大会カヌー競技大会兼第22回全国高等学校カヌー選手権大会、川根高校選手大会結果

＊女子総合成績

第1位

＊カヤックシングル（1人乗り）500m
第1位 大村朱澄

＊カヤックペア（2人乗り）500m
第4位 大村朱澄 井澤異

＊カヤックフォア（4人乗り）500m
第5位 大村・西田 安竹・井澤

＊カヤックシングル（1人乗り）200m
第1位 大村朱澄

＊カヤックペア（2人乗り）200m
第6位 大村朱澄 井澤異

＊カヤックフォア（4人乗り）200m
第7位 大村・西田 安竹・井澤

# メーン会場（全国二五ヶ所の）

## 2日間に20,000人の皆さんが、川根本町を訪れ、楽しみました。

「森と湖に親しむ旬間」（毎年7月21日～31日）は、国土交通省、林野庁、都道府県および市町村の主催により、昭和62年度から開催されているもので、国民の皆さまに、森林や湖に親しむことにより、心と体をリフレッシュしながら、森林やダム等の重要性について理解していただくことを目的に実施されています。

期間中は、全国約二五ヶ所の水源地域で、さまざまなイベントが予定されています。この機会を通じて、水源地を訪れる受益地の皆さまと、それを迎える水源地域の皆さまとが交流を図り、水と森について連携・協力し合いながら、水源地域の保全の意識をより明確にしていただくことを期待しています。との主旨で、この旬間のメーン会場が、川根本町内長島ダムを中心に、にぎやかに開催されました。

主催者の国土交通省河川局長・林野庁長官・静岡県知事よりのメッセージを皆さまにご紹介しながら、フェスティバルの様子をおとどけします。

### 行事内容

みなみらんぼう氏　宮崎　緑氏

★全国行事シンポジウム
- ◎大井川もりみず守り隊子供フォーラム
- ◎パネルディスカッション、みなみらんぼう氏、宮崎緑氏も参加、大井川流域の水と森、財政政策等について。　以下イベント
- ◎魔法戦隊マジレンジャーショウ　◎ふたりはプリキュア
- ◎ふるさと踊り大集合　◎森の音楽祭　◎流木アート講座
- ◎森と湖のうた大合唱　◎森のウォーターパーフ　◎森と水のシンフォニー
- ◎奥大井森と湖ウォーキング　◎作って食べる新体験「森のキッチン」
- ◎森の工作教室・ウッドクラフト教室　◎大井川芸術祭
- ◎水源地域探検・森の宝探し　◎森と湖のフォトコンテスト
- ◎大井川まるかじりキャンプ　◎大井川流域森と湖の物産展
- ◎静岡のお茶おもてなし処　◎長島ダム探検ツアー
- ◎ダム湖でラジコン　◎接岨湖クルージングツアー
- ◎カヌー試乗体験　◎大声チャレンジ、　◎サッカー教室
- ◎フットサル大会　◎チャレンジコーナー、　など、　編集者小沢も

29日・30日共にフェスティバルに参加致しました。

1つは、「奥大井接岨湖フェスティバル記念対談」in 南アルプスアプトライン。―大いなる水と南アルプスの豊かな森を人へ未来へ―パネラーは、国土交通省河川局長・林野庁水源地治山対策室長、静岡県知事・川根本町長・竹内礼子さんでした。アプトライン1両車内は、議論も温度も上りぱなし、暑い、熱い1時間でした。

もう1つは、「奥大井森と湖ウォーキング」の案内役でした。奥大井湖上駅から長島アスレチックステージまで、2時間強を梅地国有林を参加者とゆっくりウォーキングしました。ここは、大井川が長島側から長く伸びる半島を大きくまわる（蛇行）不思議な地形・油川河内・ユウスク川の2川が河口で1川になるなど、見どころ一杯・そして、赤松学術参考林・イワタバコの大群生との出会いもありました。戦後間もなく植栽した、杉・檜の林も、60年を経て壮観、見事な森に成長していました。通称ヒロカワヤマと言う、50余年前歩んだ時出会った1m位の苗木の生長に感激致しました。

# 「森と湖に親しむ旬間」二十年にあたって

国土交通省河川局長　門松　武

「森と湖に親しむ旬間」は、地域の方々また下流の方々に水源地の森林やダム湖に直接おいで頂き、森や湖の楽しさを味わっていただくことを目的に始められたものです。

国土交通省および林野庁の共催により昭和六二年にスタートしたこの旬間も、今年で二十周年を迎えることになりました。毎年全国各地で様々な催しが行われ、多くの方に参加いただきました。特に、全国行事については、北は北海道の岩尾内ダムから、南は沖縄県の漢那ダムにいたるまで、全国各地で開催しています。今年は二十周年の記念事業として静岡県の長島ダムで開催することとなりました。

右から、石川県知事・門松河川局長・清水水源地対策室長、杉山町長・南アルプスアプトライン車内にて

近年の気象状況を見ますと、世界的な異常気象もあり、我が国でも降雨の状況が大変荒々しくなってきています。降るときには大変な豪雨となる一方、降らないときにはまったく降らないという極端な気象状況となっています。平成十六年度は十個の台風が上陸し、日本各地で浸水被害が発生する一方で、平成十七年度には全国一〇九の一級水系のうち二十水系において渇水が発生しております。

平成十六年の洪水でも、隣同士の河川でありながら、ダムのある河川と無い河川で洪水被害が全く違うという実例が見られました。また四国の吉野川にある早明浦ダムでは、平成十七年に渇水に貢献を果たして利水容量がゼロとなったものが、台風十四号の洪水では満杯まで溜め、洪水渇水に最大限の効果を発揮したところです。このように我が国の自然条件を考えると、ダムによる洪水調節、渇水補給は、大変効果の大きなものです。

森やダムの必要性、重要性について理解を得るためには、まずよく知っていただくことだと思います。この森と湖に親しむ旬間により皆様に水源地域の楽しさ、森やダムの役割に触れていただければ幸いです。

# 「森と湖に親しむ旬間」二十周年を迎えて

林野庁長官　川村秀三郎

平素は林野行政の推進につきまして、格別の御理解・御協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

「森と湖に親しむ旬間」は国民の皆様に森と湖に親しむ機会を提供することによって、心身をリフレッシュし、明日への活力を養っていただくとともに、森林やダム、河川等の重要性について関心を高め、理解を深めていただくことを目的として昭和六二年から実施されているものであり、本年で二十周年を迎えることになりました。

この間、水源林の整備や森林、林業に関する普及・啓発活動を行うための水源林基金等が全国各地で設立されてきたほか、漁業関係者による植樹活動が活発化するなど、上下流連携による森林整備の取組が広く見られるようになりました。また国土の保全、水源かん養、公衆の保健や、近年、地球温暖化防止の観点から、二酸化炭素の吸収源・貯蔵庫として森林の有する公益的機能の発揮への国民の期待も高まっています。これらの動きは関係者が一丸

となって取り組んだ「森と湖に親しむ旬間」の成果と受け止めており、旬間の運営を支えていただいた実行委員会の方々をはじめ、森林・ダム・河川関係者等たくさんの方々の御尽力・御協力に対し、この場をお借りして御礼申し上げます。

我が国の森林は、この半世紀で量的に最も充実した状況となっており、これは、多くの方々のこれまでの多大な努力の成果でもあります。その一方で、少雨と多雨の年の降水量の開きが拡大するなど、渇水や洪水の発生が懸念される状況にあります。

このような状況に対応するため、林野庁といたしましても、森林の有する水源かん養機能などが持続的に発揮されるよう、今後とも、ダム上流域等の森林の整備・保全を積極的に推進するとともに、「森と湖に親しむ旬間」等の場を活用して、さまざまな機能を有する森林の重要性について広く訴えていきたいと考えています。

## 「森と湖に親しむ旬間」全国行事の開催に寄せて

静岡県知事　石川嘉延

長島ダムは"箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川"とうたわれ、暴れ川として全国にその名を知られた大井川の上流域に位置し、治水と下流地域の水需要を賄うために建設された総貯水容量七八〇百万㎥の多目的ダムです。

長島ダムのある奥大井地域は、南アルプス国立公園に指定され、本州で唯一の源流部原生自然環境保全地域を有することから、静岡県では、「奥大井・南アルプスマウンテンパーク構想」を策定し、自然環境を保全・活用した活性化に取り組んでいます。また、長島ダムに関係する七市五町では、水源地域の振興や水資源の保全を図るため、長島ダム流域連携協議会を組織し、毎年、イベント等を通じた啓発や流域市町の交流事業を展開しています。

こうした中、昨年六月に大井川水系は十年ぶりの大渇水に見舞われました。幸い、平成十四年に運用開始した長島ダムからの補給等が効果を発揮し、改めてダムの重要性を再認識しました。

長島ダム上流部は地質が脆弱で、急峻な地形であることから、水源地域の荒廃が進行しているのが現状です。このため国や県では、治山事業により崩壊地の復旧や保安林の機能を高める森林の整備を行い、良質な水資源の確保などの、森林の持つ多面的な機能の回復向上を図っているところです。

また、本年度から静岡県では、「森林づくり県民税」を財源として「森の力再生事業」を行い、公益性が高く、かつ所有者による管理が困難な下草がなくなった荒廃森林も整備していきます。

このように、さまざまな取り組みが進む中、今回、長島ダムにおいて、「奥大井接岨湖フェスティバル」が盛大に開催されることになりました。本イベントを通じて、全国の皆さまに水源地域への理解と関心が広まり、さらに流域全体の交流が深まることを祈念いたします。

7月29日、長島ダム堤体上部道路に出現した出店群。

森と湖のある風景画コンクール優秀作品

# 「梅地国有林こぼれ話」

―昭和五十五年度長島ダム水没地域民俗文化財調査報告書より

## ✿国有林と殿岡嗽石翁

殿岡嗽石翁（改名前は幸次郎・嘉永四年（一八五一）千頭村に生まれる。二十九歳で千頭村助役に推されて以後、生涯を地域の発展に尽くし、昭和八年死去）は、教育、茶業、林業などの振興を通して、郷土の発展につくした人として、広く知られるところである。

今回の調査においても、小学校の義務教育の普及について、精神的な豊かさを求めた修養講習会開催等について、川根茶の振興について等長島地区にもしばしば訪れて、真剣に努力されたことを何人かの古老の口から聞くことができたことは幸せであった。

雲にそびゆるむら山の　春は美くし山ざくら
緑を映す大井川　秋はにしきを織りなして
清きながれの水のおと　四方の山やまときごとに
響き絶えせぬ上川根　いとうららけきながめなり

嗽石翁の作詩になる上川根村歌は、大正、昭和にかけて広く愛唱されたが、翁のむらを愛する心情が滲み出ている歌詞である。

ところが今回の調査にあたって、「殿岡嗽石翁は林業家ではあったが、当地区のためになった人とは言えない。」といった意見を二、三の古老から聞いたことは意外であった。その理由とするところは、小学校の学区の問題、民有林を国有林に売り渡す橋渡しをしたこと等であった。そこで学区の問題は一応別に譲るとして、この地区の国有林と嗽石翁との関係について、調査結果の一部を記すことにする。

昭和三十八年版の「千頭営林署管内概要」には、梅地団地について次のように記している。

「梅地団地についての明治維新前の沿革は、つまびらかでないが、明治二十二年、この地域が御料林に編入されたときは、台帳面積三八〇町歩にすぎず各地に散在していた。左上拡大状況参照。

明治三十年から三十一年のわずか二年の間に、三三六町歩もの民有林を御料林に売り渡すにあたって、殿岡嗽石が少なからず関与したことは事実のようである。

現在、梅地、長島に住む人の所有山林は、台帳面積で三百町歩以下である。「一、三〇〇余町歩あったら地区は裕福であった筈」と考えるのは当然であろうし、老却を斡旋した殿岡翁を快よく思わないのは、理解できるような気がする。

しかし、調査の過程で違った見方をしている古老の意見も聞くことができたので、次に記すことにする。

町文化財保護審議委員、神谷正幸氏のはなし。「そのころの周囲の状況を調べないとなんとも云えないが、それなりの事情があったではないですか。例えば上部の指導があったとか。その当時としては、よい方法としてやったのではなかったですか。」

大石健治氏（明治三十二年生まれ）のはなし。「その当時の村は、広い山林を持てるような経済力はなかったと思う。兎に角、地祖だって馬鹿にならなかった筈だから、むしろ山を売りたくても御料局を相手にして、調査に立ち合ったり、そろばんを弾いて掛け合いのできる人は殿岡さんしかいなかったと思う。私は殿岡さんに面倒を見てもらって有難かったと考えるべきだと思う。」

殿岡嗽石翁の人生観には、「植林は絶対善」（どんなことがあっても植林は進めていかなければならない）の思想と、そ

梅地御料林（後国有林）拡大状況

| | | | |
|---|---|---|---|
| 明治 | 22年 | 380町歩 | |
| 〃 | 30年 | 464町歩 | 名古屋市長谷川利七 |
| 〃 | 31年 | 756町歩 | 千頭村殿岡幸次郎外3名 |
| 〃 | 〃 | 116町歩 | 〃 佐藤喜作外1名 |
| 昭和 | 27年 | 548町歩 | 島田市高橋為三（益田山＝三井家経理であった益田孝の山林であったが、終戦後高橋所有） |
| 合計 | | 2,264町歩（ha） | |

のためには、広大な林野の植林は個人で行なえるものではなく、有力団体組織による開発を図るべきだとの考えがあったようで、御料林への斡旋についても、「誰であろうと木を植えてさえおけば国は栄える。」ではなかったろうかと思う。むしろ現在のように、国有林と地域住民が疎遠になるとは、啾石翁も予想しなかったではなかろうか。

## 「川狩り物語」

―昭和五十五年度長島ダム水没地域民俗文化財調査報告書より

### 川狩りの歴史

川狩りとは、夏に伐採した木材を、秋から冬の間に、一本一本川に流して運ぶことで、バラガリと呼ばれるものである。

村松治平著「紀文と大井川」によると、元禄四年（一六九一）紀国屋文左衛門は、関の沢の御建山から御用材を伐り出して流送した、と記されているが、紀国屋の川狩りに関する文書は、梅地・長島には残っていない。

本川根町史には、享保二年（一七一七）に千頭、奥泉、大間三ケ村の御建山を調査した書上帳があり、同三年には、御用木が流れるのを、川端でのぞいたり、その外、御条目に背いて、村役人に心配かけてはならないという通達があるので、大井川の川狩りの歴史は約三百年と考えてよいと思う。

川狩りは、江戸時代は幕府の御用材を、明治以降は御料林材に民有林材も加わって続けられたが、昭和十年、千頭、市代間に発電所建設のための専用軌道が敷設され、市代に大井川発電所の堰堤構築の工事が始まるようになって、川狩りも市代までとなり、下流は鉄道輸送に切り替えられた。（大井川発電所下にて、大井川に材木を落とす施策もされた。―ふる里通信42号参照）さらに二十九年には、井川ダム建設のための井川線が開通して、長い歴史をもった川狩りも終りを告げるにいたった。

## 川狩りに関する古老のはなし

＊田代・神谷正幸氏述「田代あれこれ」より

紅葉の葉が散って木枯が吹きはじめる頃、井川のはるか奥山から伐り出された材木が川へ流されてくる。即ちバラ狩り風景がみられた。

バラ狩りとは、鉄道輸送もトラック輸送もない当時、南アルプス方面の材木を大井川へ直接落とし、流れを利用して運材するのである。時には鉄砲といって木を堰き、一度に放流したりなどしつつ、材木を下流へ流して漸次川下へ下ってくるのである。東海パルプをはじめとし、加藤、平口等の島田の山主が、沢山の人夫をつれて春先に入山し、伐採した材木を川へ落し、井川を経てこの辺へくる頃は晩秋から年末、そしてここで正月をむかえるものもあり、二月のまつりの頃までいることもあった。広い川原も一面の材木で埋まり、「大」とか「力」とか、それぞれ自分の材木にキリ印を刻んで所有の判別ができるようにしてあった。

まず最初にキバナ（木端か）という先発部隊が入ってきた。それぞれ自分の印のある材木をトビであやつりながら、よく流れるようにしていく。次でキナカ（木中か）という主力部隊がこれを流し、川岸に引っかかったりするのを押し流したりしていく。最後にキシリ（木尻か）が残木を整理していく、といった案配で各業者毎にそれをやるので、Aのキバナが入ってくる。そのあとへBのキバナ、そしてAのキナカ、その後へCのキバナ、といった具合で次から次へ入ってくる。青い草木の絶えた荒涼たる川原に、ヨンボ、ヨンボ、といったような作業の掛声とも、一種の作業歌ともとれるこえが聞こえ、大勢の川狩人夫（ヒヨウといった）がトビ一丁をつかって川の端に集団となって作業している風景を見ると、寒くなったな、の実感がわいたものである。

＊長島の古老のはなし　その一

現在の接岨峡は、渓谷の素晴らしさで著名であるが、むかしは川狩りの難所として有名であった。けわしい谷の間を流れる急流に、材木はやから（つまり、ともいった）になることが多く、これを解きほぐすのには、なかなかの危険が伴なった。このため命を落とす人夫もあって、「源兵衛落とし」「四人立ち」「青頭巾」などの地名は、川狩り人夫の遭難から呼ばれるようになった地名である。三河から来た政一という人夫は「とりまさ」という異名があったが、これは急流を流れる丸太の上を鳥が飛ぶように渡りあるくことが出来ることから呼ばれた渾名である。このような男は、接岨峡では重宝がられた。

川狩りには越中舟といって、小型の軽鋭形をした舟底の狭い舟が使われた。船頭二人で六、七人は乗ることができ、小廻りは利くし、前にもうしろにも進むことができ、敏しょうな舟であったが、ひっくり返ることも多く、操縦に技術を要するので、富山から来た越中船夫が船頭をしていることが多かった。

太くて重い丸太を、多ぜいの人夫の竿とびで、望む方向に動かすためには「木やり音頭」があった。丸太を横に転がす、縦に引っ張る、持ち上げるようにして動かす、左右の方向転換、精一杯の力を出すとき等、その都度人夫頭は木やり音頭で指図をした。「ヨ(エ)ーイヤ、コリヤ。」特別に指図する必要のないようなときには卑猥な内容の歌が出ることもあった。「ヨ(エ)ーイヤ、コリヤ。」人夫は声を揃えて竿とびに力を集中するのであった。

年配の人夫の中で一人「火いたき」に指名されると、火いたきは、食事時にやってくるであろうと予想される場所で、火をたき、湯茶を沸し、めし場づくりをした。食事は、ひる（午前九時）、にはち（午后二時）の二回で、にはちが済むと空になった弁当箱をまとめて持ち帰り、かしき（炊事婦）の手伝いや小間使いなどをした。

## 長島の古老のはなし　その二

地区の前を流れる大井川を、材木がちらほら通るようになると、会所（川狩り組織の事務所）の人が村に来て、人夫の宿を決めていった。それから二、三日すると宿替えといって、何十人もの持子（運搬人）が、ひよう（人夫）の荷物を背負い、前以って決められている宿に届けた。宿替え持子は井川や閑蔵の婦人が多く、また長島や梅地から奥泉方面への宿替え持子は、長島、梅地の婦人が多かった。（上流から一つ先の下流へ、又一つ先の下流へとリレーして行った。）

川狩り人夫の数は、川狩り材の量で異なりまちまちであったが、東海紙料と加藤さんは規模も大きくて、人夫も八十人から百人くらいはいたと思う。宿は組単位で、一組は十五人から二十人くらい、庄屋、小庄屋、人夫、かしき、火いたき等の役職があり、かしきには庄屋、小庄屋の奥さんがなっているケースが多かった。

弁当は角メンパに詰め、はやみちと呼ぶ袋に入れて肩にかけたり、後にはぢんきちと呼ぶナップサックに入れて背負うようになった。

ひようの服装は、背中に山主の印、襟に山主の名前の入った法被を着、鳥打帽にはばき、甲掛といったスタイルで、腰には派手な色あいの緒をつけたかもしかの腰皮をぶら下げたいでたち、全部が一様ではなかったが、長い間の山中の生活から人里に下りきて、川狩りは、ひと山の終りの舞台でもあって、粋ないでたちが多かった。

川狩り人夫がこの地区に泊るのは一週間から十日、川狩り材木が地区前の大井川を通過するのに要する時間は三、四時間、材木と材木が流れの中でぶっつかりあう音、木やりの声が聞え

て来ると、村の婦女子は見物に出掛けた。時計、衣類、食料品等の行商人も詰めかけて、一時的な賑わいを見せた接岨の村も、川狩りがむらを通り過ぎ、ひょうが宿替えすると、再びもとの静かなむらにかえっていった。

接岨の谷を埋めつくした川狩り風景。よく見ると下面から右上にかけて流木上に何人かが立っている。中央上部、左右の黒い線は吊り橋。

## 「梅地村百姓持山川流しの事」享保十二年（一七二六）

―昭和五十五年度長島ダム水没地域民俗文化財調査報告書より

『当村では百姓持林の雑木を伐り、それを川下げして売却し、その代金を年貢に充てたり生活費としてきた。享保八年から、雑本四千本の根伐り川下げの許可をお願いしたところ、本数が多いという理由でお許しがなかったので、山奥の辺ぴな所の窮民には、しなれたかせぎも全く無いから、と再三お願いしたところ、百姓持林三ヶ所から根伐り川下げを、当年から来る子年（享保十七年）まで、一年に五六百本宛の根伐り川下げが許可になった。　それで山入り根伐りの節は、木の種類、本数を正確に調べ、一本ごとに極印を打ち、帳面に記入し、大井川の材木揚げ場で、帳面と照合して検査をお受けする。もちろん根伐り川下げを行なう前に役所へお知らせする。』

との代官所提出の前書があり、誓約書本文が次にある。

一、川下げの時、大井川両岸の御普請所（提防）に、障りのないように、川中を通し、瀬の悪い所は御指図を受けてから、掘割りせ川せきをして通す。

一、御林と百姓林の境は、はっきりしているので間違うことはないが、百姓林伐採にかこつけて、立木はいうまでもなく、枝葉にても伐りとるようなことはしないこと。

一、そま、こびき等、他所からみだりに入れないこと。雑木買主等も、二、三日を越えて逗留する時は、日限を書付けで聞いてからとめておくこと。

一、いろいろな商人、浮るり語り、ごぜ、座頭など遊芸人を置くことは御停止になっているので、それを守ること。

一、雑木伐採は、年貢と暮しのためお願いした事ゆえ、年貢はおくれることのないように納めること。なお、雑木代を年貢に充て、餘った分は、村全体の百姓に公平に分配し、役に立たない物など買ったりしないこと。

一、お役人へ少しでも音物（贈り物）または馳走がましいことをしないこと。

右の通り堅く相守り、親類であっても、背くものがあったら申し上げます。とあります。特集を組むにあたり、接岨の谷の雄大な川狩りから、接岨の国有林のお話をお届けしました。

## 朗報 ねんりんピック弓道競技県代表として

久野和江さん（上長尾）
高木勝則さん（高郷）
中村進さん（梅高）
が出場（10/28～10/31）

開催県の特典で三チーム出場となり、町弓道連盟から三選手が選ばれて、県代表として出場、久野さん高木さんは同じチーム、中村さんは別のチームで編成されました。チームは五人（男四・女一）内七十歳以上一人とのきまりです。全国から六一チームが参加、二九日三十日に予戦が行われ、十六チームが決勝トーナメントに進む。その中に静岡三チームが含まれていました。

久野さんチームは順調に勝ち進み、準決勝進出。準決勝は静岡県同士、熱戦の末二射ちがいで、決勝進出は叶いませんでした。優勝はのがしましたが、二位、三位の好成績、その中に我が町の弓道家の皆さんの大活躍があった事を、お知らせします。おめでとうございました。

なお、久野さんは、三年連続、ねんりンピックの県代表として活躍され、去年の九州博多大会では準優勝、女性弓道家としても、加齢面からも、県内第一線選手です。これからも元気に頑張っていただきたいものです。

弓道に熱心なふる里です。中川根中学校・川根高校とも弓道部があります。中川根中の弓道部はいつも良い成績を納めています。顧問の先生、学校、そして地域の弓道家の皆さんも加わり、生徒の向上を見守るとてもいい環境となっています。

六十歳以上の方々のスポーツ・文化の祭典、ねんりンピック・競技熱に加え、県民と全国の交流の輪が広がり、よかったですね。

## 夏の思い出（二〇〇六年）

### 第7回ライチョウ会議静岡大会

―世界の南限・南アルプスのライチョウを守れるか？―

8月26日～27日、静岡市「もくせい会館」にて、国の特別天然記念物に指定された貴重な鳥―ライチョウ―の全国会議が催され、世界の南限・南アルプス、その南限、光岳周辺（川根本町）にも生きぬいていました。知られざる実態も教わりました。

日本のライチョウは、一年を通して高山に住み、冬は白、夏は白黒・茶のまだら模様に衣替えし、高山植物のガンコウランやクロマメノキを餌にして、ずんぐりとした体形・指先まで羽毛が生え、冬は雪穴を掘って寝るといった習性を持ち、高山の厳しい環境に住める適応をしている。

北アルプス・南アルプス・乗鞍岳・御岳・火打山の本州中部の高山帯にのみ生息し、その数は三、〇〇〇羽以下と言われています。日本列島が大陸と陸続きであった約二万年前の氷河期に大陸から日本に移り住み、その後の温暖化とともに高山に取り残された歴史を持ち、氷河期から日本に住み続けている鳥です。

今から四十年ほど前には中央アルプス・七十年ほど前には白山、さらにその前には八ヶ岳にも生息していましたが、絶滅しました。ライチョウは北半球の北部を中心に広く分布しています

が、日本のライチョウは世界の最南端に分布し、他の地域のライチョウとは完全に隔離された貴重な鳥です。

長い冬の間は、強風のため積雪の少ない場所に集まり、わずかに顔を出した高山植物をついばみ飢えをしのいで、じっと動かず、秋に体に蓄えた脂肪を少しずつ消費した生活を送り、雪解けの四月になると、群れの中で、雄同士の争いが活発となり、繁殖に適した場所のなわばりが確立され、一夫一妻のつがいとなり繁殖に入ります。巣は背の低いハイマツの下につくられ、六月に入る頃五～八個ほどの卵が産まれる。卵は雌が暖め、雄はなわばりと雌の防衛をして過ごし、七月に入ると雛が孵化します。雛の世話は雌がし、雄は家族と離れた単独生活に入ります。雌に連れられた雛は、初雪の降る十月までには、ほぼ親と同じ大きさまで成長し、来るべき冬に備え、親とともに白い羽毛へと羽が抜け変わり、冬の群れ生活に入って行きます。

日本では、登山道を歩いていると時々ライチョウを見かけます。その時ライチョウは人を恐れる様子を全く見せません。しかし、これは日本だけのことであって、日本以外の多くの地域では、ライチョウは現在も狩猟鳥となっているため、人の姿を見ると、飛んで逃げます。稲作文化を基本にした日本では、里と里山は人間の領域として大いに活用しましたが、水田の水の確保のため奥山には神を祀り、人が入ること自体タブー視してきた歴史を持っています。そのため奥山の最も奥に住むライチョウは、神の鳥とされ、捕って食べることをしなかった。その意味で、人を恐れない日本のライチョウは、日本文化の産物といえます。

クロマメノキ、ライチョウが芽も、葉も、花も食べるという。実は藍黒色でおいしい。

ガンコウラン（岩高蘭）

日本人にとって神の鳥であったライチョウも、最近はさまざまな問題を抱えています。登山者の増加による直接的な影響とともに、カラス、チョウゲンボウ、キツネ、ニホンザル、シカ等、本来は低山に住む動物が最近では高山帯に進出し、ライチョウの生活を脅かすようになって来ています。さらに、最近の地球温暖化は、この鳥の生息域を次第に狭めて行くことが予想されます。

世界の最南端にかろうじて生き残ってきた日本のライチョウ、これからも、日本の美しい高山の自然とともに、次の世代へ残してゆきたいものです。

☆ライチョウの住む世界で最南端の南アルプス
南アルプスの最南端は、川根本町最高峰光岳、
その光岳とその周辺を訪れてみましょう……

光岳（てりだけ）（二、五九一m）ちょっとおもしろい名前だと思いませんか。実は巨大な石灰岩の岩山が二つ、山頂直下にそびえ立っているのです。日光を浴びると、白く輝き、遠くから見ると、山が光っていることから、名前がつきました。赤石山脈は、海底から隆起した、新しい山脈です。光岩も、その証拠と言えましょう。

昭和三十年頃までは、南アルプスの静岡側からの登山口は、寸又峡でした。すでに寸又川は、昭和の初期から電源開発がすすみ、国有林内、森林軌道、作業道が網の目のようにはりめぐらせてありましたから、そこを通して

もらって、信濃俣を通り、光岳を目指し、長野県遠山郷へ下りたり、上河内岳、聖岳、赤石岳をこえて、大鹿村へ下りたり、なお、荒川岳をこえて、二軒小屋、山梨県新倉へ行ったり、大縦走をしたそうです。

この頃は、畑薙から登ぼり、茶臼岳から、光岳を目指したり、遠山川上流の易老渡からの入山が主流で、寸又川を辿るコースは、ほとんど利用されなくなりました。が、柴沢からの登山は最短距離ですし、（大井川源流部）原生自然環境保全地域のすぐ近くを通ります。寸又川左岸林道の再生と、寸又峡よりの南アルプス登山コースの再生がなされることを期待してやみません。

光岳から北東に続く山並の一番近くにイザルガ岳（二、五四〇m）があります。このイザルガ岳から光岳さらに信濃俣に続く南の稜線にハイマツ帯があります。そこにライチョウがけなげに生息しているのです。そして、ハイマツ帯の南限地となっています。

光小屋番人の原田さんの画いた絵葉書より。右は、以前（三六年前）まで使われた光小屋の様子。

原生自然環境保全地域略図

センジヶ原はかつて静高平とも呼ばれ、光小屋から見渡せる平原になっていて、構造土地形になっています。この地形は、南アルプスの主稜線の化石準平原と呼ばれる平坦に近い場所や、舟窪地形と呼ばれるやや凹んだ場所が所々に見られます。ここには、かなりの積雪による水分を供給されることから、独特の植物群が見られます。亀甲状土とも呼ばれ、センジヶ原と、茶臼岳、上河内岳間のお花畑（地名）が有名で、イネ科やカヤツリグサ科の植物が亀の甲のようにモコモコとした群落を作って、その中に、タカネウスユキソウやガンコウラン（ライチョウの食べ物）アキノキリンソウ、オヤマリンドウなどが共生していますが、ハイマツ群落は、侵入していません。台風時に、周囲から大量の土砂が流れ込んだり、鹿の食害にあったりして、その姿もはっきりと変化しているのも現実です。

＊日本で五ヶ所、本州ではたった一ヶ所の自然保護地域が大井川源流部原生自然環境保全地域（大井川支流寸又川最上流部）で、川根本町内の国有林内にあります。

原始的な自然を、人間の手をいっさい加えずに厳重に保護するために、自然環境保全法によって定められた地域で、森林の伐採はもちろんのこと、場合によっては人の立ち入りさえ制限して、原始的な環境を維持しようというものです。

大井川最大の支流寸又川の源流部にあるこの地域は、百俣沢の頭、光岳、加加森山、池口岳、千頭山と稜線がとり囲んだ中に、寸又川支流のリンチョウ沢、その支流のダルマ沢が深い谷を刻んでいる面積一、一一五ヘクタールの原生林地帯です。

この地域には、ブナやカエデなどの温帯の落葉樹林からトウヒ、ツガ、

ハリモミなどの針葉樹、亜高山帯のダケカンバ、シラビソ、高山のハイマツ群落までの豊かな植生が見られます。野生動物も多く、ツキノワグマ・カモシカ・シカ・鳥類・魚類も多数生息していられる環境となっております。

原始の森、自然、とはいっても、過去に人の手が入った時代はあった、との話もありました。リンチョウとは何の意味であったでしょう。雄作沢の名の由来は？大カシ沢には大極がそびえていたのでしょうか。自然環境保全地域以南の拡大な国有林の深山・幽谷にも細部にわたって地名や祠があることも、人間と森の長い深い歴史のあったことを物語っていると思います。この豊かな森林地帯から生まれる清流、空気、特に清流は、大井川流域をうるおし、海にとどき、海を豊かにする様な対策を切に、切にのぞみます。

## ＊三ツ星天文台と高郷大井川土手星空観察会より

◎8月13日(日)天気雨、碧田のボーイスカウトの人達が天文台に来た。夕刻より雨となり、望遠鏡観望は出来なく、施設見学と太陽系の惑星の話をする。9つの惑星のほかに、火星と木星の間に小惑星帯があること、冥王星は、2つの星がお互い引き合って自転しているらしいと、等星のこと。

◎8月15日(火)、天気晴、高郷前の大井川河川敷グランドゴルフ場にて、中川根中学の星空観察グループとスターウォッチングをする。テレビニュースで、チェコのプラハでの国際天文学連の9惑星から12惑星への検討会の事や、天の川、「銀河鉄道の夜」の話に発展、光害の話もする。

◎8月16日、国際天文学連の12惑星新定義の原案を公表。
＊セレス＝1801年、最初に発見された小惑星で小惑星帯(群)の中では最大、ローマ神話の農耕の女神、大地の女神という意味
(＊2003UB313＝2003年に発見された冥王星よりも大きい天体。
＊カロン　冥王星・カロン・UB313は冥王星族惑星といって他の惑星より、公転軌道も異なる。

◎8月18日　国際天文学連発表、冥王星は惑星とせず8惑星となる。

◎8月23日、中川根中学生と2学期のスターウォッチング、水・金・地・火・木・どってんかいかい！

＊八月十九日(土)、久しぶりの好天に恵まれ、小さな天文台は観望者であふれかえって混乱していた。フィールドで双眼鏡と全天の説明をしていた時、「静岡昆虫研究会」の人達とお話することができました。その日はウッドハウスに宿泊、各所にて、夜の昆虫を観察中だった。今夜は月明りもなく、天の川もこの夏一、二の見え方でしたが・・・・・

"モンゴルで見た天の川は、こんなもんじゃあないよ。白い雲の帯の様に北から南に流れていて、キラキラ輝いているよ。全天から星が降ってくる様だ。北極星がもって天頂に近く、(緯度が高いこと)、ここでは見えにくい北側に位置する星々も一時(いっとき)に見られる。何より、はるか全周井の地平線まで見わたせて、一八〇度の夜空の色は、まっ黒、地平線近くに見える夜空は、まっ黒から群青、青、淡青、オレンジ色に変わる現象となるとの事。"一度でいいから見てみたいものだと思いました。

昆虫研究会の皆さんは、昆虫をおって、全国各地を旅するという。南の孤島北大東島にも行ったし、外国、シベリア方面にも行くという。全国、世界とのネットワークも充実しており、情報交換しているという。が、発足の初まりは、静岡周辺の高校の生物部の昆虫の『○○で○○チョウを見た』『見に行く』の交流からという。

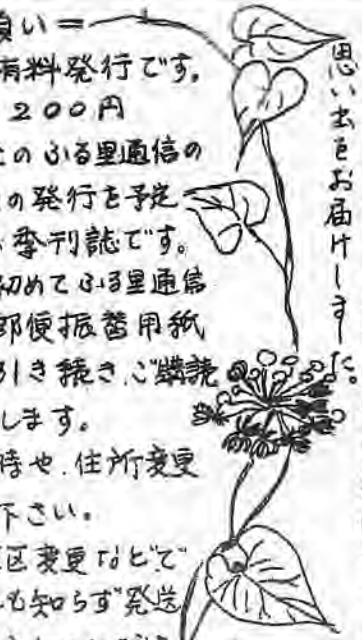
明日は、山大段方面へ出かけて、アサギマダラの様子を見に行くとの事でした。天文台を通して、いろいろな分野の様々な事をしている人々と交流できるのは楽しい事です。ほとんどの皆さんと一期一会ですが、尾呂久保の美しい夜空に魅せられて、又、訪れてくださる皆さんもいらっしゃいます。

＊アサギマダラチョウについて、水々の間とか草地をひらひらと優雅に舞う美しいアサギマダラチョウは、目に止まる人も多いかと思います。低山平野から高山までその独特な飛び方姿は目を引きますね。

何年位か前までは、県内の暖かい山地から南アルプス南麓の高地や富士山麓に移動する平野山地から高山への旅蝶だと考えられておりましたが、行動範囲は五百キロの旅蝶で、台湾や南の島々から、北海道まで飛行する あの優雅な姿からは想像できない超パワーの蝶だという事が判って来ました。

産卵は主にガガイモ科のつる性植物にし、その葉を食べて成虫になります。山芝山にはキジョラン、各平地にガガイモ、コバノカモメヅル、奥山や高山にイケマなど、アサギマダラチョウが食べる植生は多くあります。

数年前の秋の日、三星山付近で、浜松方面に向かうゴミの様なものを発見、よく見ると、アサギマダラの大群団でした。大札山から麦畑牧山への稜線の最下部から、浜名湖にかけて断層谷がひらけています。そのすぐ先は、アサギマダラが集まり、南西の海を目指し出発する伊良湖岬ですね。以上、ことしの夏の思い出をお届けしました。




＝定期購読のお願い＝

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　千円　200円

皆様の定期購読が、このふる里通信の発行を支えます。年4回の発行を予定しております。おおむね季刊誌です。購読料が切れた方、初めてふる里通信をご覧いただく方には郵便振替用紙を同封致しますから、引き続き、ご購読いただきたく、お願いします。

もし、購読を止めたい時や、住所変更のおりも、是非、ご連絡下さい。

この通信が合併や行政区変更などで市町村名等変わったことも知らず発送されている場合も、お知らせいただければ嬉しいです。

発行責任者 〒428-0313
静岡県榛原郡川根本町上長尾 859-6
小沢節子
TEL. 0547-56-0015
FAX 0547-56-0020
郵便振替口座 00870-4-81556

# ふる里のつどい

ふる里通信会員の皆さま
川根地域出身の皆さま　へ

ふる里のつどいを計画しました。
どれほどの皆さまが集まられるか
不安はありますが、とにかく、実行
いたします。20年間やろう、やろうと
思いつつ延び延びになってしまいました。
楽しいつどいに致しましょう。
是非ともご参集下さいね

いつ、　2月11日(日)建国記念日
　　11時頃より
どこで、川根本町寸又峡温泉
　　奥大井観光ホテル翠紅苑
会費　4,000円位 食事代ほか
申し込み先　小澤節子まで
　　はがきかFAXで申し込み下さい
〆切日　12月20日

右のふる里のつどいでは、川根本町に住んでいる人達との交流会にしたいと思います。会員の皆さま、出身の皆さま、友人、知人をお誘いになってお申し込み下さい。申し込まれた方には一月中旬頃に詳しいご案内をお届けします。ふる里のつどいに参加されながら、寸又峡温泉にお泊りいただいたり、ご実家に泊られたりなさって、早春の川根・奥大井の旅をなさることをお推めします。又、ご希望がありましたら、集落めぐりツアーも企画致します。第60回全国茶品評会、優勝・準優勝の久保尾地区の茶畑もお見せしたいですね。

81号、82号、発行が大変おくれましたこと、お詫び申し上げます。新年、一月末には83号をお届けしたいです。十一月十日・十一日の全国お茶まつりの様子もお届けします。